

と推定してもよいのではないでしょうか。

3. 田鎖綱紀が第1回の講習会で紫刷りにしたものを使用したと伝えられていますが、卒業生が24名もいるのに、そのときの資料やメモ類が一切残っていないのも不自然なことです。

参考までに第1回の卒業生は

高柳虎次郎、奥村梅次郎、市東謙吉、蛭江暁村、竹内友三郎、三田泰光、蘆田東雄、勘解由小路資承、酒井昇造、千葉富壽、神尾珍、山縣萬吉、若林珣蔵、佐藤潤象、石原明倫、が第1回講習会の卒業記念写真に写っております。

写真には写っておりませんが、ほかに林茂淳、前田正一がいることが判明しているにもかかわらず、当時は資料を調査しておりません。

また「日本速記五十年史」には

#### **第4編 速記者団体の興亡**

##### **速記者談話会**

(前略)

時は明治22年11月林茂淳、吉木竹次郎等とともに国会開設を目前に控えて我が速記界が従来のごとき小党分立、群雄割拠の姿であってはならない、よろしく大同団結もって共存共栄の実を挙げなければならぬとして勤説に努め、そうしてついに組織せられたのが「速記者談話会」なるものであった。これに参加する者たちまち60有余名の多きに達した。(中略)

次に明治23年10月20日、速記者談話会第4回常集会において臼井喜代松より、日本速記術第1期の歴史を編さんすべし、との提議があった。その理由は「速記術も本年第1回帝国議会の議事筆記に応用せらるるに至りたれば、第1期の速記史を編さんするに適當の時期なるべく、また速記術の創始より研究に従事したる林、若林等のごとき歴史的人物いずれも生存しいるをもって、当初依頼の実情を採求するに最も便利なればなり、よって本会において委員を選び、第1期の日本速記術編さんを託せんとす」というのであった。この提案は多数にて可決し、佃与次郎の発議により編さん方法取り調べ委員5名を置くに決し、投票の結果林茂淳、若林珣蔵、臼井喜代松、佃与次郎、薦野孝卿の5名が当選した。そうしてこれら委員の報告に基づき、明治24年1月30日、速記者談話会第5回常集会において下記のごとく議定した。

##### **日本速記術歴史編さん方法**

1. 会員中より歴史編さん委員を選挙すべし
2. 委員に当選したる者はこれを辞することを得ず
3. 歴史編さん委員は下記の条件に従い明治25年1月常集会までにこれを報告すべし
4. 明治23年以前に係る速記術の歴史を編集すること
5. 歴史の書き方は編年体によること
6. 委員は歴史編さんに関する諸般の事項を議定し事務員に報告すべし

7. 委員の必要と認むるにおいては何時たりとも会員に対し史料の提供を請求することを得

8. 委員は必要と認むるにおいては会員外に向かって史料供出を照会することを得る

9. 委員はみずから必要と認めて請求し、照会し及び会員もしくは会員外より厚意をもって供出したる史料を落手したるときは、その目録をつくり採用せざる史料にはその理由を付するを要す

次に歴史編さん委員の選挙を行いたる結果林茂淳、若林珮蔵、佃与次郎、臼井喜代松、伊藤新太郎、酒井昇造、薦野孝卿の7名が当選をした。しこうしてまた前記委員中より理事2名を互選することになって林茂淳、臼井喜代松がこれに当たることになった。

以上は明治23年10月臼井喜代松によりて提唱され、甲論乙駁微に入り細にわたって審議考究されたものであって殊に臼井喜代松の日本速記術歴史編さん論に至ってはその用意の周到なる実に三嘆おくあたわざるものがある。その詳細は明治24年1月発行の速記彙報第26冊及び衆議院事務局内衆速会発行大正15年6月の帝国議会速記史編集史料第1集に載録せられている。おしむべしこの企画は非常な意気込みで見事献立はでき上がったが、竜頭蛇尾ついに何らなすところなくうやむやのうちに葬り去られたことは返す返すも遺憾のきわみである。(後略)

という興味深い記述があります。

**編集長** 当時の速記界では速記史の編さんに対して熱心だったのは臼井喜代松だけで、他の速記者は速記史の編さんをする気持ちが全くなかったという状況だったようですね。

**管理人** 当時の速記界では田鎖綱紀、若林珮蔵、林茂淳、酒井昇造たちが現役でした。

**編集長** 臼井喜代松自身が文献等を収集したり、速記関係者に取材すれば、速記史の編さんが可能だったんですね。

**管理人** 「日本速記百年史」を読むと「日本速記五十年史」や「国語速記史大要」に比較すると詳しく書かれていない部分が多すぎます。

「日本速記百年史」あくまでも速記通史ですが、速記界では速記史の「資料編」を作成する必要があるように思います。

**注)**

\* 柄鑿相容れざる(ぜいさくあいいれざる) = 性質の違ったものは強調することができないという意味。

\* 速記時論(速記同志会/貴衆有志/明治29年3月~明治36年1月)(第26号まで)

\* 速記之灯台(日本速記器学院/藤木顕道/明治23年9月~明治23年12月)(第4号まで)

\* キソレ会報(キソレ会/大正12年5月~昭和13年)(第12号まで)

\* 松島剛(数年後にスペンサーの「社会平権論」を訳す)

\* 畠山義成(東京書籍館長/明治9年10月病死)

\*藤田積中（不明）

「議事・演説・討論傍聴筆記新法」の著者

\*校訂者・神田乃武（後の英語学者。明治4～12年米国で学ぶ。このころは24歳で、東大予備門の教諭をしていた）

かんだ ないぶ（1857～1923／安政4年2月～大正12年12月30日）英語学者

東京の生まれ。神田孝平の養子。初め開成所で英語を学び、1868年（明治1年）大学南校に入学したが、1871年孝平の兵庫県令赴任に同行し、大阪の緒方塾で高峰讓吉らと英学を修め、半年余で帰京した、のち森有礼の米国行きに託されて渡米し、帰国後大学予備門、東大教授などを歴任。1899年東京外国語学校長となり、英語教育に努めた。その間、1890年外山正一らと正則中学校を創設。1910年貴族院議員。1921年ワシントン会議全権随員。我が国英語教育の開拓者として知られる。英語教科書・辞書などの執筆が多い。

\*訳補者・黒岩 大（周六、涙香。このころは22歳で、新聞記者をしていた）

くろいわ るいこう（1862～1920／文久2年10月29日～大正9年10月16日）新聞記者、翻訳家。

高知県の生まれ。本名は周六。慶大中退。1883年以来「同盟改進黨新聞」「日本たいむす」「絵入自由新聞」「今日新聞」（のち都新聞）などで活躍し、藩閥政府攻撃を行う。1892年万朝報を創刊。また翻訳家として知られ、探偵談の翻訳・翻案を新聞に連載、多くの読者を得た。代表作は翻訳小説「噫無情」「巖窟王」「鉄仮面」など。論文に「天人論」「人生問題」がある。

\*訳補者・日置 益（後の駐独大使。このころは23歳、東大卒業前である）

編集長 速記には、複画派、折衷派、単画派とかいろいろありますね。

管理人 それでは、速記方式の基礎について説明しましょう。

速記方式を大きく分類をすると、符号式、文字式、印字式となります。符号式速記とは速記用の特殊な符号（簡単な記号）で構成されており、符号式には、単画派、折衷派、複画派、草書派があります。現在、符号式では折衷派と単画派が主流を占めております。

印字式では、ソクタイプ系のステンチュラが主力になっております。

複画派……50音のうちア行とア列が単線である以外は、すべて複線が使われおります。例外として、ア行とウ列が単線である以外はすべて複線が使われている方式もあります。

折衷派……複画派におけるエ列、オ列を単純化したものです。つまりオ列をア列の倍線とし単純化を図ったものであり、折衷派には複画派に近いものと、単画派に近いものがあります。

単画派……折衷派におけるイ列、ウ列、エ列を単純化したものです。ア列の方向を変えたり、濃線化してイ列としたり、その倍線をエ列とします。ア列の半線をウ列としています。

草書派……速字の運筆を滑らかにするために、ローマ字の綴りを利用していますが、

複画派に近いが別なものです。

なお前に上げた折衷派は、複画派と単画派の中間をいくものですが、「複画派と単画派の長をとり、短を補って」できたものではありません。初めに複画派と単画派があつて、その中間的存在として折衷派があらわれたのではなく、複画派から単画派への移行への過渡的存在です。

また、基本文字のみで複画派、折衷派、単画派と分類することには問題があります。速記は最終符号体系において、速記文字の画数がいかに少なくなったかが重要なことです。ここではあえて分類上の参考として複画派・折衷派・単画派という言葉を使用しました。

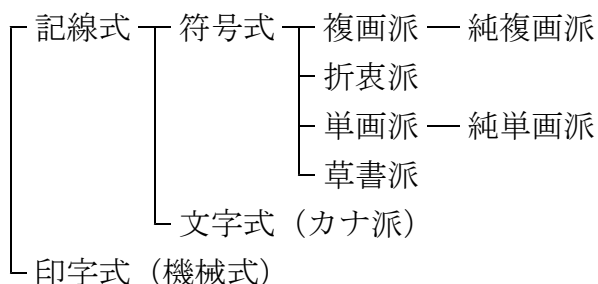
文字式……カナ文字にいろいろと工夫を加えてスピードを出そうとしたものであり、別名・カナ派とも言います。

1. カナ文字を崩した方式。
2. カナ文字を応用した方式。
3. カナ文字の一部を利用した方式。

印字式……速記用のタイプであり、通称「ソクタイプ」と呼ばれており、裁判所で使用されております。最近では、電子化をされた「はやとくん」とか「ステンチュラ」を使用しております。裁判所以外でも使用されております。

平成3年に早稲田速記教育研究所が速記用のワープロ「ステノワード」を開発し、最近では、パソコンにつないで「スピードワープロ」として実用化しております。

速記方式を分類しますと、次のようになります。



**編集長** 現在指導されている方式はどのぐらいありますか。

**管理人** 石村式、熊崎式、小谷式、スピードワープロ、中根式、日速研式、山根式、早稲田式などがあります。

現在、山根式は「大阪山根速記学校」が廃校されましたので、関西大学速記部でしか指導されておられません。

**編集長** ところで、速記方式数はどのぐらいあるんですか。

**管理人** 我が国の速記方式の数は何方式ぐらいあるかと聞かれて、大体の数字を答えることができる人はどのぐらいいるのでしょうか。

まず、これには3つの意味が込められております。

1. 現在指導されている方式数。

2. 現在使用されている方式数。

3. 明治15年に田鎖式が発表されてから今日に至るまでの方式数。

ここで取り上げるのは、もちろん3番目の方式数です。まず各方式のテキストを調べると、ほとんどのテキストについては、はっきりした数は書かれておりません。つまり現在残っている方式数とか、あるいは主な方式ぐらいしか書かれておりません。

昭和40年発行の田鎖76年式「速記の完全独習」(田鎖源一著)では約70。

昭和42年中央大学速記研究会発行の「早稲田式速記詳解」(吉川寿亮著)では80余り。

昭和48年発行の石村式「石村式速記講座」(石村善左著)では約80種。

昭和48年の早稲田式通信教育のテキスト「早稲田式速記講座」では約80。(※平成6年2月版のテキストでも同じ)

昭和50年発行の小谷式「日本語速記法S V S D50」(小谷征勝著)では100を超える。と書かれております。

では、実際には何方式あるのかということについて考えてみましょう。この方式数は人によって方式として認める基準が異なっております。

1. 速記実務者が出なかった方式。

2. 実用化されなかった方式。

3. あくまでも机上の空論として終わった方式。

4. 速記方式としてはインチキくさい方式。

5. 母式と基本文字は同一であるが縮記法、略記法が異質の方式。

6. 実用化されたが後継者のいない方式(創案者自身は使用したが、弟子に指導していない)。

などが考えられますが、これらを一応速記方式として認めるか否かで方式数が異なってきます。

私は創案者としては、速記として考案したのだから、1方式として数えてはどうかと考えております。数年の月日をかけて研究した人もおります。

また1人の人が新〇〇式というように2つ以上の方式を発表しておりますし、あるいは、1カ所の教授所で何年か置きに基本文字や省略体系を変えているところもあります。そういうことを考えて、新〇〇式とか、〇〇式(〇〇年型)というものを1方式として認めるとかなりの数になりますね。

まだ世の中には発表されていない方式もあると思われれます。

**編集長** まだ世の中に出ていない方式もありますか。

**管理人** あると思いますね。

中には方式名がわかっても、その速記文字がわからない方式がかなりあります。

**編集長** 「日本速記者名鑑」日本速記百年記念会発行(昭和58年1月31日)に掲載されている速記方式数は61方式で、早稲田式、中根式、ソクタイプ、参議院式、衆議院式、山根式、熊崎式、佐竹式、田鎖式、佃式、日速研式、国字式、木村式、米田式、長商式、カナ式、岩村式、超中根式、石村式、毛利式、森山式、松崎式、松原式、三

浦式、荒浪式、小谷式、深堀式、酒井董式、富士式、イトウ式、相賀式、若林式、三村式、安田式(貴族院式)、牧式、毎日式、カナモジカイ式、ユニ式(日速研式)、泉式、川村式、ガントレット式、水本(元)式、長谷川式(衆議院式)、森田式(衆議院式)、表象法(中根式表象法)、川守田式、新熊崎式、所沢式、寺谷式、大田式、新秀式、中谷式、酒井式、桜井式、森式、コクサイ式、TIMACE(タイムイス)式、ひらがな式、各式総合、深堀・カナ宇宙式、貴族院式などがありましたね。

\*「日本速記者名鑑」には“オンタイプ”とあるが、速記方式として認めがたいので外した。「録音タイプ」の略称と判断した。

**管理人** 現在では、もっと少ないでしょうね。

それでは、田鎖式から現在までの「速記方式史概論」に入りましょう。

日本の速記は、明治15年に田鎖綱紀によって発表されたのが最初であると言われていますが、それ以前にも欧文速記を研究した人がいたことは、先ほど説明したとおりです。

それでは、方式史の流れを簡単に追ってみましょう。

明治8年に松島剛が西洋の速記の本を買って来て友人とともに訳しそれを日本語に適用して、練習を始め、幾らか書けるようになりましたが、当時はほかにいろいろ目的があったので、それっきりになっております。

また、明治9年に畠山義成も欧米の速記の本を見て2～3人の人と速記の研究に従事し、新符号を製して世に公にしようとしたが、出版社が出版に応じなかったために、速記の本を発行できませんでした。

そのような人はほかにもかなりいたのではないかと思います。当時は速記というものに関心があっても、実用の段階ではなかったと思われる。

明治15年9月16日に黒岩大の「議事演説討論傍聴筆記法」の著作権が免許されて、明治16年7月に刊行されました。この本が日本では最古の速記の本だと言われております。

この黒岩式は、アメリカのリズレー式(Lindsley・1864)を研究したものです。リズレー式と黒岩案との関係は、K→カ行、S→サ行、T→タ行、N→ナ行、F→ハ行、M→マ行、Yの頭部のカギを取ってヤ行、R→ラ行にしております。この方式はローマ字綴りをしています。この方式からの実務者は1人も輩出しませんでした。

同じく明治15年9月19日の時事新報第169号に榎の家元園子(うめのやもとぞのし・田鎖綱紀の戯号)の「日本傍聴記録法」(後に日本傍聴筆記法と改称)という一文が掲載されたことは、前述のとおりです。この一文を見て最初に田鎖を訪れたのが林茂淳であると伝えられております。明治15年10月28日に「日本傍聴筆記法講習」会の開講式が、日本橋通4丁目の小林茶亭(貸席)で行われました。

明治15年11月4日から講習会は朝が神田の東京法学院、夜が麹町の三橋家で行われました。

田鎖式とグラハム式(Graham・1858)との関係は、K→カ行、S→サ行、T→タ行、N→ナ行、F→ハ行、M→マ行、Yを直線化してヤ行、R→ラ行としました。

このときの1期生は先の林茂淳、若林珮蔵、市東謙吉、酒井昇造たちがおり、講習会の修了者は24名のうち、後に速記で身を立てたのは先の4名だけです。

当時の講習会で6カ月の練習では、そう早く書けないと思います。現在の方式から見ると、かなり複雑な符号を使っていたので、分速100～120字ぐらいの速度だったと思います。

若林たち修了者の何人かは若林を中心に集まり速記の練習に励むことになり、もっとも若林たちは習ったとおりの速記方式を忠実に守って練習をしたわけではありません。書きにくい符号は改めたり、略字をつかって用いたりしていました。こうして田鎖式も次第に改良されていきました。

このころの方式名を書くと、明治17年には清沢案、明治18年には林案、丸山式、森本案、明治19年には金山・志田式、明治20年には中村式、明治21年には吉永案、明治22年には林甕臣（みかおみ）式などがあります。

この中で独特な方式としては森本案があります。従来の田鎖系は、ア列が単線なのに対して、森本案はウ列が単線です。金山・志田式もウ列に単線を配しています。中村式については、かなり符号の入れかえがあります。

吉永案については、どうも速記方式とは認められないような基本文字を用いております。

林甕臣式は田鎖式とは別の角度からの研究があります。国語学者であり、国語の発音の研究から速記用の符号を工夫し、発音の模写に力を入れたため、線の用い方にも独特のものがあります。

明治25年には藤木案、牧田案があり、明治26年には新田鎖式、若林式があり、明治32年にはガントレット式（Gauntlett）があります。牧田案はカナ速記です。藤木式は田鎖系ですが、純複画派です。

**編集長** 純複画派というのは……。

**管理人** ア行以外の5列が、全部複線で構成されております。

新田鎖式の方は、田鎖式を改良したものです。

若林式の方は田鎖式を改良したのが明治19年の若林式であり、その若林式をさらに改良したのが明治26年の若林式です。

佃式は複画派ですが、私の手元にある基本文字は折衷派のものです。折衷派の符号は後年のものと思われます。

明治の末期に「速記教育論争」がありましたね。

**編集長** 丹羽滝男と佃与次郎でしたね。

**管理人** 明治40年9月30日に「日本速記会」という組織が結成されました。

機関誌「日本速記会雑誌」では、速記教育をめぐる独習可能論と不可能論が対立していました。

丹羽滝男の独習可能論「速記法は必ず独習し得べきことを証す」に始まりました。丹羽の解説書「実験速成応用速記法」が、丹羽式の独習書を兼ねておりました。

丹羽の論は、優秀な速記方式の独習書または通信教育によって、学力のある壮年者

が独習することを条件としておりました。熊崎健一郎も独習可能論を支持しておりました。

これに対し、塾形態で成果を上げてきた佃は、独習不可能論を固執して譲りませんでした。

佃は速記方式の解説書を書くことが独習者を誤らせるとして、最後まで佃式の解説書を書いておりません。

当時は、府県会速記技手養成所、帝国速記学会、日本速記専門学院などの通信教育が誇大な広告によって善良な学習者を毒していたと伝えられております。佃の主張にも十分な根拠を見出すことができます。

**編集長** 我々が、速記を学習したころには考えられませんね。

**管理人** 当時は、速記の習得が難しかったのかもしれないですね。

我々のころは、テレコで速度練習ができましたし、速記の通信教育などが確立をされていきましたからね。

**編集長** 結局、速記文字を覚えても、最後は速度練習なんですね。

**管理人** テレコがなかった時代は、他人に朗読をしてもらわなければなりませんでしたからね。

**編集長** やっぱり速記学校に入学するのが手っ取り早いでしょう。

**管理人** 速記学校に入学しても、結構落伍者がおりますよ。

**編集長** 独習や通信教育でも落伍者は多いのは仕方ありませんね。

**管理人** 速記を学習する場所は、余り関係がないように思います。要は速記に対する情熱だけだと思います。

さて、本題に戻ります。

ガントレット式ですが、イギリス人エドワード・ガントレットは東京高等商業の英語教師として明治23年に来日していました。次いで千葉中学に移り、そのころガントレットは日本にも速記方式があるかどうかに関心を持ち、田鎖系諸方式の解説書を購入しましたが、改良の余地があることに気づきピットマン式 (Pitman・1837) の再検討から出発しました。そうして明治32年にガントレット式を発表しました。子音符号で2種類の線を使用したのも、ガントレット式が最初です。ガントレット式は折衷派の元祖と言ってもよいでしょう。

明治35年には矢野案、明治37年には野崎式、明治38年には武田式、村上案、明治39年には熊崎式、吉村式、伊東式、井辺式 (いんべ)、明治40年には日下部案があります。

武田式はピットマン式から研究を始めて、単画派方式をつくりました。武田式は単画派の元祖であると言ってもよいでしょう。

また、ガントレット式の発表は田鎖系に満足しない速記者の速記方式研究意欲を刺激しました。そうして習得した速記方式を積極的な改良に進む者を生むに至りました。そのような立場で独立したのが熊崎健一郎の熊崎式です。熊崎式は田鎖式の改良方式